

曹洞宗総合研究センター第13回学術大会特別部会  
東日本大震災をうけて、いま私たちに何ができるのかを考えるシンポジウム  
開催報告③

平成23年10月24日 午前10時～ 於 曹洞宗檀信徒会館3階 桜の間

第2部「被災者と共に歩む～東日本大震災の支援活動に学ぶ」  
パネル発表「組織の枠組みを超えた連携を目指して」

発表者① 被災地支援において仏教者とNGOはどう連携できるか  
公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 大菅俊幸氏

### 1、はじめに

公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA）の大菅と申します。よろしくお願いたします。とくに曹洞宗の皆さまには日頃から大変にお世話になっておりまして、そのご支援、ご協力のおかげで今日のさまざまな活動ができるのだと思っております。心より感謝申し上げます。

私どもの団体は、「曹洞宗東南アジア難民救済会議（JSRC）」を前身として、一九八一年に発足した教育分野の国際協力NGOです。当初は「曹洞宗ボランティア会」という名称でのスタートでした。東京事務所を中心拠点とし、タイ、カンボジア、ラオス、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ、アフガニスタンの国々に、海外事務所を置いて活動しております。

また、1995年に発生した阪神淡路大震災以降、これまで国内外で20回を超える災害救援を実施してきました。それらの経験を活かして、宮城県気仙沼市と岩手県遠野市に事務所を開設して、現在、東日本大震災の被災地支援活動に取り組んでいます。

限られた時間ではありますが、まず8月末までのSVAの気仙沼や岩手での活動について報告させていただき、そのうち被災地支援において仏教者とNGOはどう連携できるのか、感じていることの一部について発表させていただきたいと思えます。

### 2、こうして緊急救援は始まった

#### (1)まずは現地へ

震災発災の翌日、3月12日。急遽、スタッフ七人による緊急救援タスクチームを編成し、現地派遣と支援活動の組み立てのため、初動活動を開始することを決めました。

東北在住の関係者の安否確認、現地の情報収集、現地入りの準備、そして募金活動や報に向けての準備などを始めました。

3月15日、山形県在住の当会役員が車で被害状況の視察のため被災地に入りました。まず宮城県気仙沼市に入り、そこから北上して岩手県の陸前高田市、さらに釜石市、大槌町へと向かいました。この役員はこれまでも阪神淡路大震災の現場や中越地震災害の現場に立ったことのある人ですが、今回、目の当たりにした悲惨さはそれまでとはるかに違う、と伝えてきました。

火災に見舞われれば別ですが、そうでなければ、地震で家屋が倒壊したとしても、そこにまだわが家はあるわけで、衣類や貴重品、思い出の品を探し出し、掘り出すこともできます。しかし、津波による災害は、根こそぎすべてを奪い去ってしまうものだということが思い知らされました。家を失い、車を失い、町を失い、愛する家族を失った多くの人びとの悲しみと絶望を思う時、この災害とどのように向き合っていけばいいのか、この国の人びとが総力を結集して立ち向かわなければとても乗り越えることはできない。現地からその悲痛な思いを伝えてきました。

被災地は南北に縦長に広がっていて、道路が寸断され、ガソリンも不足して思うように動けません。したがって、関東以南からの支援は難しく、北に行けば行くほど支援の手が届きにくくなっていました。ですから、今回の支援は、西から東へという支援の動き、つまり、山形や秋田から岩手、宮城、福島を支援する動きが有効ではないかと考えられました。さらに、物資は被災地まで届いていたようですが、電話がほとんど使えないために、横の連絡がとれず、支援の偏り、分配の偏りがみられました。報道されているような大きな避難所だけでなく隠れた被災地への細かなリサーチと支援が早急に必要でした。

いち早く現地入りしたこの役員は、現地視察と同時に、これから始める救援活動の拠点をどこに作ったらいいか、その場所を探しました。そして、曹洞宗宗務庁の神野哲州財政部長と合流し、協力していただける寺院を探すことになりました。先ほども紹介しましたが、当会の前身は「曹洞宗ボランティア会」であり、多くの熱意ある僧侶に支えられてきた団体でもあります。これまでの国内災害においても、全国の寺院や僧侶との連携を念頭に活動を組み立ててきました。地域に根ざし、室内においても境内においても広い空間を有する寺院というのは、被災地の活動拠点としてとても有効です。今では、一般にお墓のある場所という印象が強いですが、近世までは地域の避難所や福祉施設としてのはたらきを果たしてきた歴史があるわけです。

私どもが、こうして災害救援活動の際、いつも寺院と連携していることに対して、今では、他のNGOも注目してくれるようになってきました。

## (2)震災後、仏教者はどう動いたか—阪神淡路大震災時との違い

その背景の1つとして、今回の東日本大震災の被災地における宗教者、とくに仏教者の存在感というものがあるのではないかと思います。多くの仏教者が被災地に駆けつけて、積極的に、精力的に活動しています。1995年の阪神淡路大震災の時とは、隔世の感があります。

思い起こすのは、阪神淡路大震災の年、1995年の10月、国際宗教研究所の主催で京都で行われた「阪神大震災が宗教者に投げかけたもの」というシンポジウムのことです。

そのときは、仏教はじめ、キリスト教、神道、新宗教などから多数のパネラーが参加したのですが、コメンテーターとして参加した宗教学者の山折哲雄氏の発言が物議をかもすことになりました。「被災地に宗教者は立っていなかった。主役を演じていたのは、ボランティアであり、カウンセラーであり、精神科医であった」と、半ば挑発的な発言をしたのです。それに対して、「マスコミの報道だけから判断するのは学者のとるべき態度でない」などと、ただちに辛辣な反論が応酬されました。

曹洞宗の皆さんと連携しつつ活動していた私どもからすれば、山折氏の発言にはまことに忸怩たるものを感じましたが、しかし、残念ながら、たしかに被災地の寺院が門戸を閉ざしていた面があったのは事実です。ボランティアの受け皿としてお寺の一部を使わせていただけないかとお願ひに行っても、檀家さんに迷惑がかかるとか、葬儀や法事などに支障をきたすから、と断われました。正直言って幻滅を感じたものです。それだけに、その後、真光寺（時宗）さんや八王寺（志保見道元住職）さんが、ボランティアのために一時的にでも庫裏を開放してくださったときは本当に感謝、感激でした。

あとで、整理してお話ししたいと思います。今回、被災地では、被災者の方がたの避難所として檀信徒や一般の方がたを受け入れた寺院がたくさんあります。そして、全国各地から、救援物資を配布するため、あるいは復興作業の手伝いのために救援活動に駆けつけた僧侶の方がたもたくさんいます。被災地や遺体安置所などに赴いて、読経して供養をして歩いた僧侶も少なくないと聞きます。

阪神淡路大震災のころと何が違ったのでしょうか。やはり災害救援に対する意識が高まったということは間違いないのだと思います。困った時はお互いさま。「ボランティア元年」、と言われた阪神淡路大震災以降、当時神戸に駆けつけたボランティアが中心になって、全国レベルのネットワークがつくられ、どこかで災害が起きたときは、すぐに駆けつける体制が整っていきました。同時に仏教者においても、公益性や社会貢献に対する意識、ボランティアやNPO活動に対する理解が高まり、行動する人びとが増えてきたということもあると思います。それにしても今回の震災は、あまりにも甚大な災害で、とても座視できないという現実もあったと思います。それから、東北という地域の寺院と檀信徒との普段からのつながりの強さによるところもあったのではないかと思います。

とくに今回、「宗教者災害支援連絡会」という宗教者によるネットワークが組織化され、宗教を越えて情報共有し、連携していこうという気運が生まれたのも画期的なことだと思います。また、仏教NGOネットワーク（BNN）に加盟する仏教系NGOや僧侶たちが、それぞれの活動の様子を共有し、そこから得た教訓を今後の智恵として伝承しようとしています。

### (3) 救援活動の準備

さて、SVAのことに話を戻します。3月16日、当会緊急救援担当のスタッフら二人が被害状況の調査のため、現地入りしました。まず宮城県石巻市に入り、そこから北上して南三陸町を経て気仙沼市へ入り、その調査結果を踏まえ、関係者とも検討の上、気仙沼市に拠点を置くことを決めました。

というのも、仙台までは、比較的、交通のアクセスがよく、多くの支援の手が入ることが予想されたからです。むしろ宮城県北部と岩手県南部の海岸部が支援の手も届きにくく、必要性が高いのではないかと判断したのです。気仙沼に拠点を置いて、さらに余力ができれば、そこから南北に活動地を広げていく、ということも想定しました。



2011/3/18 瓦礫となった家で、探し物をする男性(石巻市)

3月25日、さらに、緊急救援担当としての経験を有するスタッフら2人が気仙沼に入りました。気仙沼ボランティアセンターをバックアップすることと、当会の活動拠点とするお寺の事前調査が主な目的でした。僧侶役員も複数駆け付け、陸前高田市や気仙沼地区、宮城県宗務所第16教区のご寺院を訪ね、ご協力をお願い、物資の配布先、炊き出しニーズの調査等をさせていただきました。そして、初期の活動拠点として、気仙沼市内の少林寺さんが候補地として考えられました。宝鏡寺さんには、落慶前の新築庫裏を倉庫としてさまざまな物資を置かせていただくことになりました。

3月26日、これらの調査をもとに策定した事業計画案を臨時理事会に提出。ただちに承認されました。まずは被災者の衣食住を確保する活動に取り組むこと。そして、地元の団体との連携や、全国各地とつなぐプロジェクトの実施。さらにはコミュニティ復興支援も視野に入れた計画で、予算規模1億円、1年間の活動期間、と決定されました。また同日、東京新宿区信濃町の真生会館において、一般対象の被災地報告会を開催し、被災地に入ったスタッフが視察の結果を報告しました。

### (4) なぜ、気仙沼ボランティアセンター支援だったのか

まず、SVAは気仙沼の社会福祉協議会に協力して、ボランティアセンターの発足に協力することを決めました。行政職員自身も被災者であり、救援体制が整うには時間がかかりそうだったからです。ただ、そればかりでなく、地域の復興は地元の人々が中心になって行うもので、私たちはその支え手であるべき、という考えからでもあります。私たちは、所詮、よそから来た者。いつかは去ってゆく者です。SVAという看板を背負って活動するにしても、地元の人びととの信頼関係がなければ、地元に着した活動はできません。



SVA気仙沼事務所

コーディネーターが鍵であること、地元の人びと、地元の団体と連携し、信頼関係を構築することが肝要であることを痛いほど学びました。それは、SVAだけではなく、すべてのボランティア団体が受けた洗礼であったと言ってもいいと思います。そんなわけで、今回、当会の二人のスタッフを派遣し、まず気仙沼市の社会福祉協議会の一員として、ボランティアセンターの立ち上げ、軌道に乗るまで一緒に活動することにしたのです。

#### (5) SVA気仙沼事務所を開設

その一方で、もちろんSVAとしての拠点づくりも進めていきました。いくつかの候補があったのですが、結局は、清涼院さんのご好意により、その境内に事務所を建てさせていただくことになりました。多くのご支援により、4月15日、気仙沼市本吉町、清涼院境内にコンテナハウスを設置（事務室、物資倉庫、最大25人が宿泊可能な宿泊棟）し、気仙沼事務所開設となりました。車両8台（2トントラック1台、軽トラック2台、乗用車5台）を投入。緊急救援担当スタッフの2人を中心として、他に約15人前後のボランティアが活動する体制が整えられていきました。

### 3、緊急救援活動(3月～5月の活動)

こうして生活支援、まちづくり支援を展開していったのですが、当会はもともと教育支援を専門としてきた団体でもあり、子どもたちの支援も念頭に置いて活動を組み立てていきました。3月から5月まで取り組んだ主な活動は次の通りです。

#### (1) 気仙沼市災害ボランティアセンター立ち上げと運営支援

2人のスタッフを派遣し、気仙沼市の社会福祉協議会と協働し、災害ボランティアセンターの立ち上げと運営支援に取り組みました。また、同センターと連携して本吉町の前浜地区を中心に、被災家屋周辺に散乱した瓦礫の撤去や津波によって破砕した神社の鳥居の片付けを行いました。3月28日、気仙沼市災害ボランティアセンター開設。この2人のスタッフは4月末までサポートにまわりました。

この背景には、阪神淡路大震災の支援活動の時の苦い体験があります。当時は、明確な受け入れ体制が整っていませんでした。神戸の行政職員も被災者であり、大勢のボランティアがかけつけても、被災状況を把握し、コーディネートする人がいないため、立ち往生する人も少なくなかったのです。「ボランティア難民」という言葉も生まれたほどでした。

## (2) 避難所巡回

他のボランティア他団体と分担し、本吉地区と唐桑地区の21の避難所を巡回担当。1日に4、5カ所を巡回。ニーズ調査、炊き出し、入浴送迎の調整を行いました。



宮城県気仙沼市浄念寺での炊き出し

## (3) 炊き出し

全国の協力団体とともに、陸前高田市や気仙沼市本吉地区の避難所や小学校16カ所で約6000食を配食しました。

し

## (4) 文具セット配布

宮城県と気仙沼市の両教育委員会と連携し、4月19日、市内の11カ所の小学校にノートや鉛筆など18種類の学用品やセットを配布しました。この活動には全国の曹洞宗婦人会の寺族、会員の方がたにもご協力いただきました。



2011/3/21 気仙沼市松沼小学校での文具セット配布

## (5) 入浴プロジェクト(4月21日～5月30日)

水道などのインフラが整っていない地域を中心に、1週間に9カ所の避難所を対象として、温泉施設への送迎を実施しました。5週間に45回運行し、各避難所から、のべ743人に利用していただきました。また、5月14日～16日には、山形県最上町の観光協会主催の山形温泉ツアーを行い、10カ所の避難所から合計183人が参加しました。



2011/4/25 岩手県一関市への温泉ツアー

## (6) 行茶プロジェクト

この活動は、避難所を訪問し、緑茶やコーヒーと一緒に飲みながら、避難所にいる方がたの声に耳を傾ける傾聴活動です。4月21日より開始。地元僧侶の有志を中心に5月末まで3カ所の避難所・集会施設で計6回実施しました。各回20～50人が参加しました。

#### (7)絵本を届けるプロジェクト

気仙沼市内の階上小学校、津谷小学校、小泉小学校、馬籠小学校へ絵本、図鑑、児童書を配布しました。

#### (8)あそびーばー(協力事業)

「NPO法人 日本冒険遊び場づくり協会 (プレイパーク)Youth for 3.11」と協力し、気仙沼市大谷地区にて子どもたちのために、「遊びの場」(あそびーばー)を4月26日に開設しました。子どもは大人と違って自分の体験を言葉によって十分に表現できません。しかし、遊びを通して、心の傷を癒すことができます。



あそびーばー(子どもたちの遊び場)

「遊びの場」には、手作りのすべり台、調理場、ターザンロープなどがあり、プレイリーダーのもとで安心して遊ぶことができます。来場数は、週末、子ども約100人、大人20～30人。平日や雨天の日には、子どもが約20人集まりました。

### 4、緊急から復興へ(6月～8月の活動)

#### (1)祈りの日々

さて、震災から3ヵ月たった6月。「遺体が見つかって、おめでとう、というのはおかしいと思うんだけど、そうやってしまう」。避難所ではこんな会話が交わされていました。まだ行方不明の方も多く、身近な人の遺体が見つかるように祈り続ける人びとの姿が見られました。避難所から仮設住宅への移行もなかなか進まないためにストレスが溜まっている方も多く見受けられました。そんなわけで、折しも、夏まつりの季節を迎え、このような人びとが少しでも元気を回復できるよう、地域のお祭りやイベントの運営などの手伝いに力を注ぐことにしました。一方、6月10日の理事会において、活動期間を2年間に延長すること、予算規模を2億円と変更することが決定されました。1年という期間ではとても短いであろう、という判断からです。人的体制においても、地元の人と活動することを大切に考え、6月21日付で、気仙沼事務所のスタッフとして、地元在住の青年を1人、現地採用。同じく、8月1日付で、同事務所広報担当兼総務補佐として、青年1人を現地採用することとなりました。

## (2)お祭りの運営サポート

8月14日、気仙沼市本吉町で「平磯地域復興祭」が開催され、この地域に伝承される伝統芸能「虎舞」が披露されました。SVAも運営の裏方を手伝い、かき氷の出店で参加しました。また、気仙沼で現地採用された地元出身の青年は、地元の人びとに請われて、初体験の虎舞の演舞に参加しました。じつはこの開催まで紆余曲折がありました。津波で道具一式が失われ、一時は、今年の開催の中止が検討されたのです。しかし、全国からの支援によって、「平磯虎舞保存会」が復活し、大谷地区の「大漁唄い込み」などとともに、当日の舞台上で晴れて披露されることになりました。この復興祭を今年もぜひ実現したいと、震災直後から、地域の人びとに働きかけ、こつこつと浜辺の清掃をしてきた人びともいたといいます。そのような熱意によって実現した祭りでした。

「やっぱり、俺たちは海でしか生きられない。これが生きがいだべ」と、誇らしげに語る漁師たちに活気が甦っていました。1980年代のカンボジア難民キャンプでも、阪神淡路大震災後の神戸でも感じたことですが、伝統文化や祭りというものが、戦火の下にいる人や災害を受けた人びとに、いかに大きな元気を与えるものであるか、改めて感じさせられました。



2011/8/14 気仙沼の郷土芸能「虎舞」

## (3)地域コミュニティ支援

こうして手伝ったお祭りやイベント開催は、次の通りです。

### ①お祭りの手伝い

- 7月23日～24日 唐桑半造星まつり
- 8月13日 がんばっつおー唐桑夏祭り
- 8月13日～14日 気仙沼みなと祭り
- 8月14日 平磯地域復興祭
- 8月15日～16日 小原木鎮魂のつどい

### ②イベント実施、調整など一地域、避難所、仮設住宅において

- 6月4日 登米沢凧作り
- 6月12日 法話会
- 8月5日 東日本遺父母の会
- 6月18日 新月中学校健康支援プロジェクト
- 7月19日 東長寺コンサート
- 7月19日 石川さゆりコンサート



- ③その他、行茶、青空カフェを実施（7ヵ所で15回）。  
足湯活動を調整（4ヵ所6回）。温泉ツアーを実施。

#### (4)子ども支援

震災の影響により、小中学校の夏休みは、始業式の遅れによって、例年にくらべ期間が短くなっていました。それに伴って授業の遅れが心配されていましたが、学生ボランティアが主体となって、4ヵ所で、25回の学習支援を行いました。また、気仙沼市内の9ヵ所の幼稚園や小学校に防災ずきんを配布しました。6月に気仙沼市内で行われた避難訓練において、子どもたちが使用していました。

#### (5)炊き出し

8月15日までに、16ヵ所の避難所で、7068食分の炊き出しを実施しました。

### 5、岩手の移動図書館プロジェクト、発進

#### (1)SVAの特徴を活かした活動を

「SVAらしさを活かした活動ができないだろうか」「子どもたちのための図書館活動はできないだろうか」。気仙沼での活動を開始して1ヵ月ほどたったころ、支援者やスタッフの中から、そんな声があがり始めました。そこで、5月2日、岩手県沿岸部の被災地にある図書館の現状視察と、支援の可能性を探るため、事務局次長と広報課長が岩手に向かうことになりました。

5月2日、盛岡市にある岩手県立図書館訪問から始まって海岸部に移動し宮古市へ。そこから南下して山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市へ。5月6日まで、5日間の調査でした。陸前高田市立図書館、大船渡市立三陸公民館図書室、大槌町立図書館、山田町立図書館を訪ねると、予想されたとはいえ、いずれも壊滅状態でした。備品も流失し、まったく機能していませんでした。大船渡の図書館は、当分の間休館。その他は、再開の目処さえ立たないという状況でした。とくに陸前高田市立図書館は、図書館員が全員行方不明か死亡ということでした。それでも、被災した地域の図書館員に話を聞くと、希望を捨てていないことがわかりました。「こんな時だからこそ、今出会う本が一生の支えになると信じています」「本を読む文化を残していく手伝いをしてもらえるだけでありがたい」。支援に対する期待感がにじんでいました。とはいえ、行政職員のお話から、図書館の復興などは一番後回しになることは明らかと思われました。

被災した子どもたち、大人たちのために、読書の機会を提供する—これまでの蓄積を活かし、まさにSVAがとりかかるとすべき仕事ではないか、そのような結論に達し、事業計画を立案して提出しました。そして6月10日の理事会において、移動図書館活動を中心とした岩手県における図書館事業の計画案が承認されました。岩手県山田町、大槌町、大船

渡市、陸前高田市の仮設住宅などを対象とし、人びとの孤立化を避ける意味でも、本の貸し出しだけでなく、定期的に小さなイベントも行い、交流の場となることも配慮することにしました。そして、終了時期は、仮設住宅が閉鎖となる2年（または3年）後、行政のサービスが終了する時点までをめどとすること、その後は、地元NPOを立ち上げ、撤退後も一定の資金提供で応援することなどが盛り込まれました。

車に図書を積んで各地を回って読書を推進するこの活動は、創立以来、30年間にわたって取り組んできたSVAにとって最も伝統ある活動です。1980年代、カンボジア難民キャンプを車で回り、子どもたちに読書の機会を提供したのがこの活動の出発点でした。アジア諸国で実践してきた活動を日本の被災地で取り組むことになり、これまでの蓄積を日本という土壌でどう活かせるか、私たちにとっては新しい挑戦となりました。

## (2) 遠野市に岩手事務所オープン

すでに5月から始めていた岩手の拠点探しでしたが、被災地に比較的近く、アクセスも便利な、岩手県遠野市に事務所を借りることに決定しました。借りた場所は、元縫製工場。工場は数年前に閉鎖されて、人の出入りがなかったため、最初の一週間は床ふきなどの掃除や壁貼り。そして、倉庫の本棚の組み立て。本の受取と整理。貸し出しシールを貼る作業など、ほぼ1ヵ月、ボランティアたちの精力的な活躍で準備が整いました。

スタッフ体制も、広報課長が兼務で岩手県図書館事業のスーパーバイザーに、同じく、国内事業課のスタッフが岩手県事務所現地責任者として、異動が6月1日付で発令され、また、岩手の人と一緒に活動したいという願いから、図書館担当として7月1日付で男性スタッフ1人を岩手で採用。その後、8月1日付で、同じく図書館担当として女性スタッフ1人、そして経理・総務担当として女性スタッフ1人を地元から採用することになりました。

## (3) 図書館車、岩手を走る

7月17日（日）、午前8時過ぎ、まだ名前もない移動図書館車が岩手事務所を発進。「いわてを走る移動図書館プロジェクト」がようやく始まりました。軽トラックに本棚を積んだ小さな図書館車を先頭に、4台の車にスタッフ、ボランティア計12人が分乗し、一路、陸前高田市へ向かいました。

寄贈を受けた1万5000冊余りの本から、約800冊の絵本、コミック、小説、料理本などを選び抜き、初日は、竹駒、高田、広田、小友の四地区の仮設住宅を回りました。最初にやって来たのは子どもたちでした。「何やってるの?」「マンガ読んでもいい?」「わたし、絵描く」。子どもたちのはしゃぎ声が呼び水になって、その後、色々な方が立ち寄ってくれました。「仮設にいて本が借りられるなんてありがたい」「この本は子どもが大好きで、家にも置いてあったんですよ。津波で全部流されたけど……」。

本の貸し出しだけではありません。手にした本をきっかけに、みんなの話が広がってい

きました。本についてのお話、3月11日に体験したことのお話、昔このあたりに嫁いできたころのお話。滞在時間の1時間はあっという間に過ぎていきました。こうして、7月17日の初めての運行から8月末まで、36回の移動図書館活動を実施しました。433人が利用し、901冊の本を貸し出しました。



2011/7/17 陸前高田市の仮設住宅での移動図書館活動

#### 6、今後に向けて(2011年9月以降の活動について)

9月6日現在で、募金総額は271,844,234円。これまでの災害時と桁はずれです。それだけ、今回の災害に対する人びとの熱いまなざしと温かい思いが注がれているということだと思います。バンコクのスラムやラオス、カンボジアなど、SVAの活動地からもいち早く寄せられました。彼らの生活水準は高くないはずなのに、そう思うと本当に頭が下がる思いです。

このような温かいご支援を背景に、これからもSVAは、地縁社会を礎にした地域の暮らしの再建をサポートしてまいります。今後は仮設住宅に入居した方がたが孤立感を深めたり、孤独死の問題が起きないように、地域の住民組織などと連携して、見守る仕組みづくりが必要とされます。そして、何と言っても必要とされているのは、生業復興のための支援です。被災した沿岸部の人たちは観光や漁業、およびそれに関連する産業が壊滅的な打撃を受けたため、生業(漁業)の復興なくして生活再建はありえません。

とってSVA単独での実施は困難です。行政、企業、専門家、NPOなどとも連携し、たとえば、生産者と消費者をつなぐ一村一品運動のようなものを検討していくことが必要と考えられます。

また、この夏、祭りの開催に関わることを通して、伝統文化の復興を通して人びとが活性化できる可能性が見えてきました。



2011/3/20 バンコク、クロントイ・スラムでの募金活動

「文化」というアイデンティティを取り戻し、心の拠り所をもつことで復興をはかる営みは、SVAが創設以来、大切にしてきたことでもあります。日本各地の人びととの交流とか、SVAが関わっているアジアの人びとや伝統芸能との相互交流など、SVAが仲立ちとなって実現可能な方向が見えてきたと思われま

す。岩手の図書館事業については、これから冬場は野外での移動図書館活動は困難となるので、仮設住宅にある集会所や談話室に本棚を設置します。本は定期的に入れ替えます。また、大槌町と陸前高田市には仮設図書館を設置し、敷地内の仮設住宅や周りにお住まいの方に開放する予定です。

福島県については、地震と津波に加え、原発事故による被害を受けて、今なお故郷に戻れない方がたなど、苦しみを味わっている皆さまを思うとき、一刻も早く、継続的、本格的な支援にとりかからねばならない、と考えています。地元のSVAの支援者の皆さまと情報交換を続け、また、実際に福島を訪ねて調査を重ねているところです。これまで「被災地応援寄席」などのイベントを開催してきましたが、今後、移動図書館活動の展開なども視野に入れて、福島の皆さまの必要に叶い、なおかつ当会が可能な継続的支援活動に着手したいと考えております。

## 7、被災地支援における仏教者の役割とは

さて、活動報告が長くなってしまっていて恐縮です。しかし、じつはこれらの活動は曹洞宗寺院や僧侶の皆さんの大きな協力によって動いてきたものです。繰り返すようですが、気仙沼の活動は、清涼院（三浦光雄住職）さんというご寺院の境内に拠点を置かせていただき活動しているわけですし、気仙沼にしても、岩手の移動図書館の活動にしても、活動の中核メンバーとなって活動しているのが長野や静岡など、曹洞宗寺院の副住職の皆さん方です。そして、入れ替わり立ち替わり、やはり全国の宗侶の皆さんがボランティアとして関わってくださっています。私どものようなNGOと連携することで、仏教者の皆さんに大きな力を発揮していただけることは疑いのないところだと思っています。

では、そのことも含めて、今回のような災害救援の際に、仏教者や寺院がどんな役割を果たしていただけるのか、今回の活動を通して感じていることをお話したいと思います。少なくとも次の要素があると思っています。

- ①義援金、救援物資の協力
- ②NGO、NPOとの連携
- ③宗教者としての自発的活動
- ④寺院空間の開放
- ⑤防災寺子屋の開催
- ⑥イベントの開催

では、一つひとつについて述べていきます。

### ①義援金、救援物資の協力

これについては、言うまでもないことだと思います。宗教者に限らず、被災地に行かずとも、それぞれの実情に応じて、誰にでもできる支援活動です。ただし、とくに募金の場合、一般的に、日本赤十字であるとかユニセフであるとか、有名団体、大きな団体に偏ってしまう傾向があります。有名であり、信頼性もあり、それでけっこうなのですが、しかし、小さくても、機動性や迅速性のあるすぐれた活動をしているNGOやNPOはたくさんあります。そちらにも目を向けて応援していただきたいと思います。もちろん、NGO、NPO側ももっと広報の努力をしなければなりません……。

### ②NGO、NPOとの連携

これについては、先ほども述べたことではありますが、私どものようなNGO、NPOのコーディネーターやボランティアとして活動することもできます。

SVAの場合、各地の曹洞宗青年会の皆さんもリピーターとして熱心に関わってくださっています。初期のころは、炊き出し部隊として活躍してくださいました。岩手の移動図書館活動や仮設住宅での活動では、秋田曹青の皆さんが大変精力的です。また、静岡の浜松曹青の皆さんなどは、やがて発生すると言われている東南海地震などに備えたいと、SVAのスタッフと一緒に気仙沼の寺院を訪ねて、どんな準備が必要になるのか、インタビューして、リサーチ活動をしています。これなども、とても素晴らしい展開ではないかと思っております。曹洞宗全体として、こういう動きをサポートして1つの智恵としてまとめ、全国寺院に共有し、曹洞宗の共有財産にできたら素晴らしいのではないかと思います。

他にも、長野県内の曹洞宗寺院の有志でつくっている「なごみの会」というグループがあるのですが、この方がたは、SVAや落語芸術協会と連携して、被災地の子どもたちを励ましたいと、福島の小学校や、岩手の保育園などに出かけて、被災地応援寄席を開催しています。落語やマジックなどで子どもたちに笑顔がみられるようになりました。

こうして、考え方しだい、工夫しだいで、NGO、NPOと連携して色々な支援活動ができると思います。

### ③宗教者としての自発的活動

また、今回ほど、宗教者としての役割や活動が求められたこともなかったのではないかと思います。色々な場面がありました。

たとえば、被災地ではご遺体の扱いについて課題がもちあがりました。各自治体で火葬できる能力を超えるほど多くの方がお亡くなりになったのです。自治体は「仮埋葬」という手段を決定しました。仮埋葬というのは、いったん、埋葬してから再度掘り起こして火葬するというものです。限られた時間の中、火葬場がとても対応できず、苦渋の決断だったのだと思われます。しかし、遺族にとっては大変な心痛を伴うものでした。

人口1万5000人の岩手県の大槌町では、人口の1割の方がたが亡くなりました。仮埋葬を決定して、山を切り開いて穴を掘って埋める準備をしていましたが、遺族の皆さんは「仮埋葬はしのびない。火葬したい」とおっしゃっていました。岩手県内が無理なら山形まで搬送してもらいたいと。そこで、山形からご遺体を迎えにあがり、火葬してお骨にして、ご遺族には温泉に入ってください—そのような活動を精力的に行った曹洞宗のお坊さんもいらっしゃいます。岩手県だけではなく宮城県石巻市などからも搬送したケースもあったようです。

仮埋葬という決定ではなく、国レベルで、自治体レベルで火葬を引き受けるよう各地の火葬場に指示してもらいたかったという気もします。しかし、行政だのみではなく、今後、またこのようなことは起こりうるわけで、今回の山形のお坊さんと岩手、宮城のお坊さんたちとの連携のように、県や地域を越えて対応できる曹洞宗の寺院どうし、あるいは宗派を越えた寺院どうしのネットワークをふだんから作っておくことが必要ではないかと感じました。ぜひ、ご検討いただきたいと思います。お寺や僧侶が支えとなって機能できる道がそこにもあると感じます。

その他にも、被災地では、自ら被災しつつも、「こんなときにこそ宗教者が支えなければ」と、供養に出かける一方で、檀信徒を励まし続けている僧侶もいます。「気持ちに区切りをつけるために供養してほしい」という相談が寄せられ、そのような声に応じて、遺体安置所での読経を申し入れた僧侶もいます。快く受け入れられ、読経させていただいた場合もありますが、上司にうかがいをたてる、という理由で、断られた場合もあるといます。自治体や施設によっても対応は異なるようです。そして宗教に対する偏見もあるように思います。

遺体安置所が難しいならば、亡くなられた現場で花とお線香を手向け、読経しようと活動している僧侶もいます。また、精霊流しのように、それぞれに願いの言葉を紙に書いてもらって海に流す、そんな供養の企画を考えている僧侶もいます。

そのほか、ツイッターやフェイスブックなどの媒体によって、さまざまな垣根を越えて、これまで考えられなかったつながりや広がりを見せたのも今回の支援活動の特色でした。このような新しい媒体を駆使することによって、今後、宗派を超え、仏教界全体のネットワークや展開が可能であることを感じます。

こうして、宗教者として自発的に行動できる役割、はたらきはさまざまにあるのだということを、今回ほど感じさせてくれたこともなかったように思います。

#### ④寺院空間の開放

さて、次に、お寺という建物、空間自体を活かせるという点です。先ほども触れたように、今回の震災後、本堂や庫裏を避難所として檀信徒や地元の人びとのために開放した寺院は数多くにのびります。

石巻市の洞源院（小野崎秀通住職）さんのように、一時、400人の被災者を受け入れ

たところもあります。4月1日を期して、朝課の勤行をスタートするようにしたそうですが、読経することはいっさい強制したわけではないのに、朝課の勤行に1人増え、2人増えして、やがて3歳の子どもから80代のお年寄りまでほぼ全員が参加して読経し、ご詠歌も唱えてくれるようになったといえます。それからは、朝課、ラジオ体操、作務清掃、朝食、集会（ミーティング）まで、ほとんどの人が参加してくれたそうです。

ただ、最初の1週間は陸の孤島の状態で支援物資も届かず、きびしい状態であったのですが、やがて支援物資が届けられるようになり物資が豊富になってくると、避難者もあれがほしい、これも食べたいと、わがままがエスカレートして、共同生活に乱れが生じてきたそうです。そこで約束事8カ条をつくり、皆さんで守ることを約束していただいたそうです。そのようなご苦労があったということですね。

それから、避難所としてだけでなく、お寺を開放してくださった例があります。

私たちがお世話になっている気仙沼の清涼院さんは境内を私どもNGOの活動拠点のために開放してくれました。その他にも、亘理町の高音寺（岡崎正利住職）さんのように、お寺の駐車場を地域の人びとに開放し、そこにテントを張って支援物資の配布所としたところもあります。例をあげればきりがありません。以上は、被災地のお寺のありようであったわけですが、被災地外のお寺にもできることがあります。実際に被災地に出かけることはできなかったにせよ、日常の朝のお勤めなどで、物故者供養を行ったり、月命日に合わせて読経したり、目に見えないところで行動した僧侶の皆さんも、たくさんいらっしゃいます。それから、和歌山県の童楽寺（真言宗）さんは、一時的な避難先として、福島の子どものご家族を一時的に受け入れたといえます。このお寺は、もともと里親委託を実践している寺で、子どもたちを受け入れているお寺ではあったのですが、ただ、こうして、子どもたちだけでなく、大人も含めて、被災者の皆さんを受け入れたお寺は他にもあると思われる。詳しく調べてみたいところです。

こう考えますと、たとえば、災害が起きたときに、被災者の皆さんを一時的にでも、受け入れることは可能かどうか、調査し、それぞれのお寺の意向もうかがった上で、受け入れOKという全国の寺院のリストやシステムが整備されるならば、もっとお寺が機能できる面があるのだと思いました。これについても、ぜひ、曹洞宗全体の展開としてご検討いただきたいと思います。

## ⑤防災寺子屋の開催

次にお伝えしたいのは、災害時ではなく、普段の防災体制ということについてです。

SVAでも、これまで「防災寺子屋」というプログラムを実施してきましたが、お寺に中心拠点になっていただき、子どもを主な対象として地域の人びとと協働して行う防災教室を実施してみてもどうかと考えます。

地域の大人たちが連携して子どもたちの安全と安心を守る。そのための活動を地域に根ざしたお寺でやってみる。それによって、少しでも地域の活性化と、お寺の社会的なはた

らきが増進する一。そういうコンセプトの企画です。

今回の津波で小学校の子どもたちが犠牲になったいたましい例がありましたが、そういうことを繰り返さないためにも、こういう企画は是非、必要ではないかと思います。

## ⑥イベントの開催

その他、SVAでは「被災地応援寄席」というプログラムを行っています。

これまでもSVAは落語芸術協会と提携して、お寺を会場として行う寄席「チャリティ寄席」という企画を行ってきましたが、とくに被災地のお寺さんが被災者の皆さんを少しでも元気になるように、「寄席」を開催して励まされたいと希望される場合、落語芸術協会とともに応援させていただくというものです。

被災地だけでなく、被災地以外のお寺でも、被災地支援のための「チャリティ寄席」として行うことができます。何も、寄席に限らなくてもいいわけですが、こういう形で、被災地のお寺において、あるいは被災地外のお寺においても、何らかのイベントを行うことで、少しでも被災者の皆さんの励ましとなることができると思います。

というわけで、もちろん、今お話ししたものばかりではなく、仏教者が果たせる役割はさまざまにあると思います。

## 8、おわりに—宗教心の地殻変動に仏教者はどう向き合うのか

では、本日、どうしてもお伝えしたいことを最後にお話しさせていただきます

未曾有の災害をもたらした東日本大震災は、いかに生き、いかに死を迎えるか。そして愛する人を喪失した後、いかに生きるか。そして、そのような人びとをどう支えればいいのか。そのような人生の最重要課題を大きく浮き彫りにしたと思います。

身近なところでもそのように感じる場面がありました。たとえば、8月のある日、気仙沼市本吉町に住むある女性が、SVAの気仙沼事務所に訪ねてきて、こんなふうに言いました。

「私の弟夫婦、子どもを亡くして気を落として今も何も手がかたずに苦しんでいるんです。親を亡くした子どもは注目されますが、子どもを亡くした親は注目されない。子どもを亡くした親のための集まりをつくってもらえないでしょうか」

その声はとても重いと思いました。私どもは、そういう専門的な知識や技術をもった団体ではありませんが、何とかしてさしあげたいと思って、仙台市にある専門の団体をお願いして、連携して定期的な集いを行うことになりました。

そのとき、私はこう思いました。このように愛する存在を突然に失い、内に秘めた悲しみを他に語れずに悶々と苦しんでいる人は少なくないのではないか、と。1日も早い復興を、とよくいわれます。でも、目に見えるものだけではなく、傷ついた心を癒し、立て直さなければ、本当の復興になりえないのではないのでしょうか。そのことを忘れたくないと



思いました。

そして、そんな矢先、ある文章が目にとまりました。終末期医療に造詣が深いノンフィクション作家の柳田邦男氏が『スペシャル文藝春秋』の季刊秋号（2011年）に寄せている文章です。東日本大震災後、死生観が根源から問い直されている状況を論じているもので、その中で、宮城県で在宅ホスピスに取り組んでいる岡部健さんというお医者さんの言葉を紹介しているのです。少し長くなりますが、重要だと思うので、その箇所をご紹介します。

村々にある野仏を見る度に思うんです。この地に人々は何千年も繋がって生きてきた。藤原3代の時代からでも1000年です。それらの人々のなかには、他者のためにお地藏さんになった人がいっぱいいたんだとね。平安時代に仙台平野を襲った貞観津波（869年）が注目されていますが、それより古いお堂も残っている。そういったものを尊ぶ心が息づいている。東北人ならではの土着の宗教心を自分も持たないと、被災者や患者と本当に深く向き合うことはできないし、ケアもできない。私はこれまでたくさんの人々の看取りをしてきましたが、そういう意味での宗教心について、思いが至らなかった自分を反省しているんです。

これからは、医療界だけでは被災者を支え切れません。すでに被災地で僧侶と牧師と神主が一緒になって、心を繋ぐカフェを開いたりしています。津波で大事な人を喪った人を支えるには、物凄いエネルギーが必要です。亡くなった人たちの魂を自然界に戻してあげないと、遺された人が立ち直れない。被災者の後ろにしっかりと立っていてあげないと、被災者は崩れてしまうでしょう。医療者は宗教家の力を借りないと、死と向き合えないです。これからどのような連携で、大震災による死と向き合っていくか、大きな課題です。

このような岡部医師の語りを紹介しつつ柳田氏は、土着的な宗教心への理解がないとケアの心は届けられない、という問題は、ただ津波被災者のケアだけに限定されるものではなく、今後のケアのあり方に対する根源的な問いを発する契機になっているのではないかと指摘しています。

この一文を目にして、3・11を境として日本人の死生観、宗教心に地殻変動が起きていると感じているのは、私ばかりではなく、多くの人を感じ始めていることなのだと思います。

これまで、死後の生命や魂などについては、「あるのか、ないのか」という観点から、いわば存在論的に論じられてきた感じがあるといえるかもしれません。お坊さんに質問すると、しばしば、仏教は無我を説くものであり、死後まで続く永遠不変な実体はないのです、という答えが返ってきます。しかし、津波で大切な人を喪った方がたは、今も故人との強い心の「つながり」のうちに生きています。そして、切実な思いで、その「つながり」を育もうとされているのです。その人びとに、故人の魂は「あるのか、ないのか」という議論はどれほどの意味をもつのでしょうか。教義や思想を言葉で伝える、というより、人びとの魂の本当の支えとなる宗教者が求められているのではないのでしょうか。このような死生

観、宗教心の転換期に、仏教者はどう向き合い、これからどう歩いてゆくのでしょうか。  
今度の津波災害は、そこまでの根源的な問いを発する契機にもなっていると思います。

私どもも、仏教精神を拠り所としているNGOとして、今後、尚一層、皆さまのご要望  
にお応えし、連携できる団体となれるよう、精進してまいりたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。